

研究発表

国際俳句データベース

The international haiku data base

HELEN. ISAACSON*

Ten thousand haiku from the time of Masaoka Shiki up to around 1935 have been entered into the computer, translated into English with line by line, word by word annotations and explanations of Japanese customs and haiku concepts, to make a data base reference system available in automatic rapid reference computer form. This has been carried out by the International Haiku Project with the support of the Netherlands Organization for the advancement of pure Science, and its result is entitled the International Haiku Data Base.

The purpose of this project has been to provide a large reference tool for Westerners in their efforts at understanding the Japanese language and culture. Japanese Kana majiri texts have been inserted with the generous support of prof. M. Nagao of Kyoto University, so that the haiku texts are available in two languages. The sampling of the data includes the works of more

* HELEN SHIGEKO ISAACSON 〔現職〕 グローニンゲン大学音声科学研究所員

than 3000 people who took part in perhaps the world's largest "literary" movement, explainable in terms of the unity of man and nature in the traditional Japanese society which had its roots in Confucian, Taoist and Buddhist thought. More than 1200 kigo are represented, an English translation of Shiki's Mumonkan, and explanations of about 4500 items in his Tanehon are included. Programming in the computer has allowed quick indexing, editing, formatting, and compilation of selected topics.

日本文学の重要な議題について討論の機会を本日此処に持ち得た事を幸せに思う。

殊に、言葉と思考に関し、これらの価値が崩壊し、無意味なものに陥りつつある現代に於て我々は今迄のどの時代に増して真の誠実さという方向に於て、歴史が今迄記録した秀れた例証を研究し、我々自身の思考を鍛錬する必要に迫られていると言えよう。

我々のインターナショナル俳句プロジェクトの歴史を語るにはハロルド・アイ・アイザクソン New School for Social Research, New York 大学教授が「現代技術を人間精神に貢献させ得る」と確信を持った1968年に戻らねばならない。同教授が理解した現代の問題とは「拡大する多様な非現実性の奔流、人々を溺め捕る貪慾と無知から我々を救出する為に、人間は何を為すべきか？」という事であった。同教授は世界の主な文明国の歴史、芸術、文学を学び、日本の俳句が世界の様々な文学形式の中に於てこの問題を解決するのに適したユニークな便法、形式だという事を発見した。これを説明する為に謡曲、白楽天を引用したい。その中に「天竺の靈文を唐土の詩賦とし、唐土の詩賦を以て我が朝の歌とす。されば三国を和げ来たるを以て大きに和ぐと書いて大和歌と読めり。」とある。その昔聖人の教えに従い、詩文は歌の尊

さを通し国を政めたのは心の真を養い私心無しの政治を重んじた故であろう。その大和歌より現われて来た連歌、俳諧及び俳句は順に人々に拡がり大乘仏教の無量義を示した。古今集の序文に「花に啼く鶯、水に住む蛙、人間のみにかぎらず生きとし生けるもの和歌を詠ず。心を種とし、万の言の葉とぞなれる。」とある。では俳句についてはどうであろうか。

俳句は和歌の延長上にあると言えよう。和歌という心や情感の世界を越えた、全ての物が同等に見える世界である。我々の住む物理世界の発露、表現の全てが詳細部分とその明確な特徴の中に見られる時、究極的には一つとなるという事である。心の状態がそこに辿り着くには高遠ではあるが、しかし俳諧の道を鍛錬する事によりそこに至る事は可能である。この意味に於て俳句は詩を越えたもの即ちスーパー・ポエトリーと言うことが出来よう。そして俳句の修練に依り、全ての人々がそれぞれ自分自身の短所や付属物を取り除く事が出来ると言えよう。

同教授の発想は西洋人の為の俳句辞典を作る事であった。俳句は西洋に於て人気を増してはいるが、それは気のきいた個人の表現形式として理解されている様に、明らかに甚しく誤解され、誤訳されている。事実、西洋社会に現れた俳句ソサエティーの全んどが彼等の個人的詩的表現を創り出すのみで俳句研究並びに俳句の真の意味についての手引を何も持たないグループである。残念ながらアイザクソン教授の構想は教授の歿後4年目に私が遺志を継ぎ、自分の能力に懸念を持ちながらも着手するまで実現されなかった。

オランダグロニンゲン大学のグラハム・スチュワート教授がこの険しいプロジェクトを The Netherlands Organization for the advancement of Pure Science (純粋科学研究の為のオランダ政府機構) に申請し、この3年間の援助を受けることが出来た。その内容は、科学的見地に於ては、辞典を作り、編集、迅速な照合の為に形を変換し、全体の体裁を整え、構成し、西洋人が日本語及び日本文化を学ぶ為西洋人によって道具として使用され得る様、写真オフセット複製のために整理されたレイアウトの中より部分を選び取る事

の出来る、以上の設備をもつ完全なデータ・ベースを開発する事であった。

一方、文学的側面からは、子規派の1万俳句にそれぞれ逐語訳、上、中、下の各句についての訳、内容とその形式に応じ解説を施す事であった。私達は実際、2種類の翻訳を行った。1つは原文に出来るだけ忠実な訳、他方は俳句が英語に成れば斯くの如く成るだろうという訳であった。多くの日本独特な発想、日常生活の様々な対象物や習慣等には長い解説が必要であった。例えば「風薫る」、「鐘霞む」等の概念は西洋人には単なる言葉の翻訳だけでは把握出来るものではない。「炬燵」「笥」「花の幕」等は日本の生活の中で作り出され、用いられ、完全に適応したものとなっているが、西洋人には理解し易いものではない。「祭」「初不動」「十日戎」などは此等がどの様に受継がれてきたか、又、此等に対し日本人がどの様な態度で接して来たか等の細部についての理解も当然必要であるが、同時に神道と仏教への理解も必要とされる。

我々にとって、約1200の本季語と他に1000の季語の類型を持つ10000句の課題は容易なものではなかった。又、此等をコンピューターにどの様にインプットすべきか、如何に機械が同じ季語を持つ俳句を知り、認識することが出来るかという様な問題が解決されねばならなかった。3年間の初めの半分は我々は、只、目隠しの儘闇の中を手探りで進む状態であった。データを収集して行くにつれ、次第にこれが如何に膨大で無数の項目を持つ仕事かが明確になって来たからである。試行錯誤に依り文学と技術の両方の部分がデータ・ベースで働き出した。多分、コンピューターというものは素晴らしく、又、便利なものと言うべきであろうが、しかしそれは人間がコンピューターに教え込み、全ての情報を与え、正しく作動する様扱い、宥め賺した後でのみ言い得る事である。データ・ベースが大きく成るにつれ、只、作業を前に進めるだけでなく、今迄行って来た後を振り返る事も必要に成った。漢字の読みを訂正したり、歳時記の解釈の相違により本季語について不一致が生じた場合には校正する必要があった。又、或る俳句について此の意味だと理解して

いたものが半年後再読すると他の意味に理解出来たり、或る事柄を3人の日本人に尋ねると違った3つの意見を得たり、此の如く作業は続き、言葉や習慣等について新しい発見が何かある毎日だった。しかし、それらが頭に蓄えられ、記憶されて居れば問題は無いが、悲しい事に、この点に於て人間の頭は愚鈍な機械の様である。「秋の風」は秋、「花」は春と言った様な事は別としても、その他についてはデータの増大に伴い各々記憶するのが困難に成った。全ての事物について多くの書物に触れ、何度も調べ直さねばならなかった。

此処で、私は、このデータベースに収められている3000人以上の俳人名と全ての俳句の読みの点検の労をとって戴いた俳句文学館と村沢夏風氏、並びにデータ・ベースに漢字カナ交り文を挿入する事の労をとって戴いた京都大学工学部の長尾真教授に厚く感謝の意を表したい。このデータ・ベースの利点はどの様なミスも即座に訂正出来る事である。そこで、多くの日本人がこれを通して読まれ、データベースをどの様にすれば更に進んだものと出来るか等の有意義な示唆を与えて戴ければ、我々の甚だ幸いとするところである。

各々の俳句の翻訳の難しさは、翻訳の為には日本の古典文学に親しんでいる必要があるのみならず同時に中国の哲学、詩文、仏教思想をも識る必要があるという事である。一方、生物、植物、文化人類学等の知識も必要で、一言で言うならば全てに涉り識らねばならないという事である。人間の脳と言う脆弱な存在にとって全く絶望的にも感じられる作業である。我々が常時参照した有意義な書物の1つは大版5分冊の図解大歳時記だった。数については不確かかも知れないが、その中では少なくとも150人の人々がその完成と成功に貢献していたと記憶している。我々は今回のプロジェクトに初めの1年半は常時2名、後半の1年半は3名で任った。契約の義務を3ヶ月の延長期間の後、漸く果したが、私は未だ校正、翻訳、解説の更なる改善を試みている。満足のゆく処迄到達するには私の残りの生涯を全て必要とする様に思われる。

データ・ベースは2巻の磁気テープに収める事が出する。我々はデータ・

ベースが日本の公共の図書館、もしくは博物館に収められ、誰にでも利用される事を念願している。多分データ・ベースの中には未知の事柄、日本の人々に忘れ去られた事柄が多く収められていよう。貴国で今、捨て去られ、忘れ去られつつある古い日本文化や言葉についての研究と同時に、現代日本で必要性の増している英語の習得にも有意義だと確信する。

とりわけ我々の時代が混乱のさ中に在り、困迷している時、人々を暗闇から誠実と真実に導く1つの燈明の役割を果すであろう。

討議要旨

井本農一氏から、データとして1万句が入力してあると発表があったが、その選定基準を聞かせて欲しいとの質問があり、発表者から、「ホトトギス」など多くの俳誌、及び歳時記などを資料として、自分（発表者）が選択した。その時の基準はなるべくいい句を選んだが、西洋人には俳句がどのようなものであるべきかを知ってもらうために、あまりいい句でないものも入れた。そして、4つの鑑賞ランクを1句1句につけておいた、との返答があった。

栗田靖氏から、三句索引や、語句索引もできるようになっていると思うが、語句索引の場合言葉のいいまわしの違い、例えば「薫風」と「風薫る」などはどのように処理したのかとの質問があり、発表者から、本季語のインデックスとサブインデックスの季語を指定しておき、それが対応できるようになっているとの返答があった。